

### 阿蘇地域における肉用牛の放牧事故の特徴

阿蘇地域における放牧牛の放牧事故率は毎年約 0.5%で推移しており、症例別では行方不明や滑落等の放牧事故が多くみられる。また放牧地での死亡事故は、年齢 10 歳以上の牛、分娩予定 1 ヶ月前の牛、秋から冬にかけての時期でそれぞれ多くなる傾向があった。

農業研究センター草地畜産研究所 (担当者: 津田健一郎)

### 研究のねらい

阿蘇地域は肉用牛の放牧が盛んな地域であるが、放牧事故の頭数や事故の詳細については、データが公表されておらず全容が把握されていない。放牧事故の詳細を把握することで事故を未然に防ぐことが可能となり、市販化が進む放牧 ICT 機器の活用と併せることで、さらなる事故低減の効果が期待できる。そこで阿蘇地域の放牧事故データと畜産統計情報他を用いて、放牧事故の特徴を明らかにした。

### 研究の成果

- 阿蘇地域の市町村 7 地域の 2013 年から 2023 年における家畜共済加入牛のうち、放牧地内で死亡した成牛のデータから以下の結果を得た。
  - 阿蘇地域の放牧事故率は、毎年約 0.5%で推移している (図 1)。
  - 市町村別の放牧事故率は 0.2%から 1.2%の範囲があり、市町村で違いがある (図 2)。
  - 放牧事故症例は、原因不明、行方不明および滑落の 3 項目で 8 割以上を占める (表 1)。
- 2010 年から 2022 年の間に阿蘇地域振興局が対応した、放牧地で死亡し引き揚げ困難な事例から以下の結果を得た。
  - 年齢別事故頭数は、1 歳未満および 10 歳以上の年齢が多い (図 3)。
  - 分娩予定日までの期間別事故頭数では 1 ヶ月未満が最も多いことから、放牧牛の退牧が遅れると、放牧事故の危険性が増すことが示唆される (図 4)。
  - 月別放牧事故頭数は、季節放牧期間において 7 月から冬に近づくごとに増加する (図 5)。

### 成果の活用面・留意点

- 放牧事故率の算出には、熊本県畜産統計の放牧頭数を使用した。
- 放牧事故を未然に防ぐための基礎資料、放牧 ICT 機器の導入時における事故低減の費用対効果を算出するための基礎資料として活用可能。
- 本研究は「国際競争力技術開発プロジェクト (事業主体: 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構) の支援を受けて実施された。

【具体的データ】 No. 1072（令和6年（2024年）6月）分類コード13-14 熊本県農林水産部

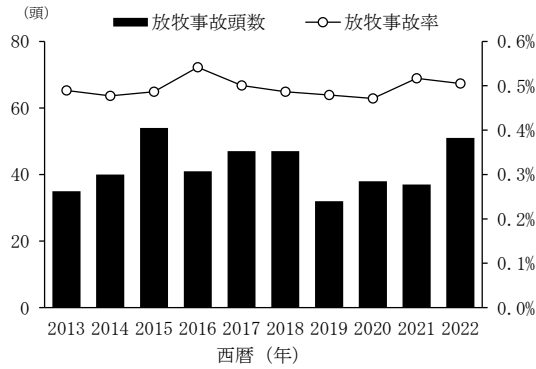


図1 放牧事故頭数と放牧事故率の年次推移

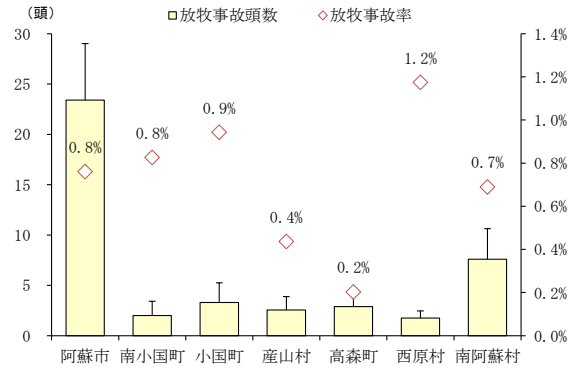


図2 市町村別の放牧事故頭数と放牧事故率

(放牧事故率 = 放牧事故頭数 / 放牧頭数)

表1 家畜共済加入牛の放牧事故の

症例別頭数と割合

症例名	頭数 (頭)	割合 (%)
原因不明	183	43.2
行方不明	125	29.5
滑落	60	14.2
心不全	20	4.7
分娩事故	14	3.3
その他	12	2.8
骨折等	6	1.4
ピロプラズマ	2	0.5
電撃	1	0.2
溺死	1	0.2
合計	424	100

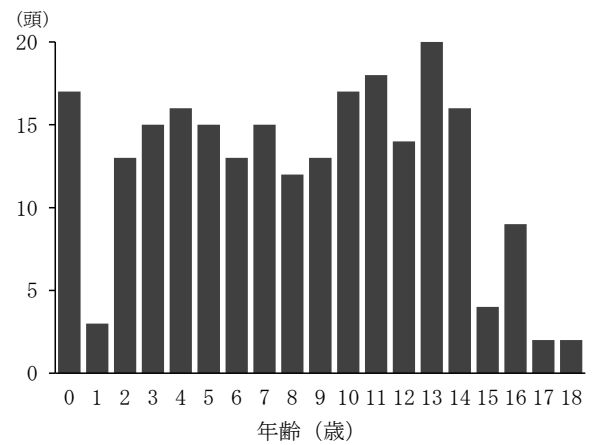


図3 引き揚げ困難な放牧事故頭数の年齢別分布

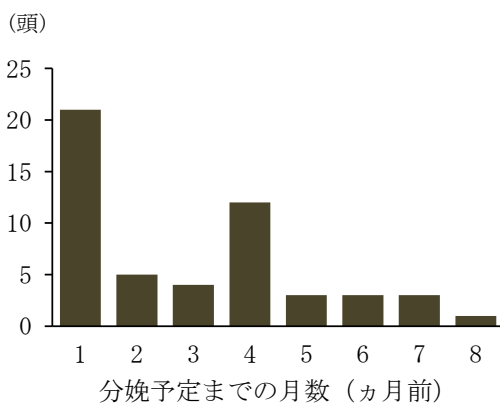


図4 引き揚げ困難な放牧事故頭数における分娩予定日までの期間別分布

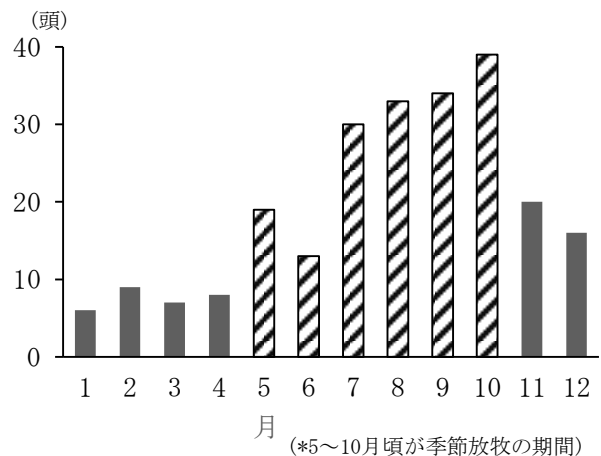


図5 引き揚げ困難な放牧事故頭数の月別分布

(\*5~10月頃が季節放牧の期間)